平成28年度入学式　式辞

春の息吹と瀬戸内の柔らかな光と風が満ち溢れるこの広島の地に、11 名の留学生を含めた 717 名の皆さんを県立広島大学の新入生としてお迎えできましたことは、私達の大きな喜びとするところです。おめでとうございます。併せて、入学許可を受けてここに立たれている皆さんの成長をこれまで支えてこられました保護者の方々に、県立広島大学を代表致しまして心よりお祝いを申し上げます。おめでとうございます。さらに、ご多用の中、本日は湯﨑広島県知事を始め、多くのご来賓の皆様にご臨席いただきました。誠に有り難うございます。

＜どうぞお座りください。＞

本年度は、県立広島大学が誕生して 10 周年を終え、新たな 10 年、そして未来へとさらに飛躍する年でもありますが、さらに本学にとって、記念すべき歴史を刻むことができました。すなわち、社会の大きな変革期を切り開き、広島そして世界を視野に入れたビジネス・リーダーの育成を目指す中国地方で初めてとなる経営専門職大学院、いわゆる MBA をここに開設し、まさに今、非常に高い受験倍率を勝ち抜いた 30 名の社会人を、その第一期生として新入生の輪の中に迎えることができました。本学そして広島県経済発展への、さらなる貢献になると確信しております。この MBA の設立にあたりまして、設置者である広島県はもとより、県内の企業、経済団体を始めとする県内の皆様からいただいた幅広いご支援に、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

さて、本学の基本理念は「地域に根ざした、県民から信頼される大学」ですが、私達は、この最大の実践は、誇るべく優秀な人材を育成して地域社会に送り出すことにあると考えています。今、入学許可を受けた学部生、そして MBA を含めた大学院生一人一人に対して、希望に満ちたそれぞれの自己実現に向け、教職員一同、精一杯、人材の育成に取り組むことをここでお約束致します。

それでは、皆さんを迎え入れます我が県立広島大学について紹介をしたいと思います。本学は、2005 年 4 月に広島市における県立広島女子大学、庄原市の広島県立大学、そして三原市の広島県立保健福祉大学を再編・統合し、一つの新たな県立広島大学として開学しました。95 年前の県立広島高等女学校の専攻科設置に由来する県立広島女子大を始め、それぞれ地域に根ざし、歴史ある独特の個性を持った 3 大学をどのように統合して新たな大学を築いていくのか、統合時において構成員が様々な議論を重ねましたことを想い出します。今、ここで明確に言えますことは、毛利元就の三子教訓状ではありませんが、県立広島大学は、統合後 10 年を経た現在、束ねられた一つの大学としてさらに強みを活かし、発展した確かな歩みを地域社会に示すことができているということです。

それでは本学再編後の 10 年の歴史を簡単に辿ってみます。開学にあたって私達は、最初に、大学力の基盤となる教育力と研究力を高める努力に焦点化しました。例えば教育については、新たに設置した総合教育センターを核として、組織を挙げて授業に対する学生の

満足度の向上に努めました。その結果、本学全授業を対象とした満足度の数値は、統合初年度は 80%でしたが、毎年上昇を示し、昨年度は 94%にまで達しています。学生が授業に満足を感じることは､大学の教育成果を上げるための何よりも重要な前提条件となります。

一方、研究についてはどうでしょうか。文部科学省からの科学研究費助成事業の採択件数は、大学研究力を示す客観的な指標とされています。本学では、その数値は統合後著しい上昇を示し、一昨年度は統合前の 2 倍以上、106 件の採択件数にまで達し、この 9 年間、中・四国・九州 26 公立大学の中では開学時の 3 位から、現在は、際だったトップの座に位置しています。こうした教育力と研究力は、相乗効果を発揮して本学の誇るべき資産となり、現在の、我が県立広島大学の教育・研究そして地域貢献を推進する上での底力となっています。

学生も負けてはいません。本学学生の勉学に取り組む姿勢には、目を見はるものがあります。例えば、数値で示せるものとして国家試験の合格率を取り上げます。一昨年度のデータで言えば、管理栄養士、看護師、助産師などは全員合格、100%の実績を残しています。特に管理栄養士については 4 年連続 100%でしたが、これは全国で本学のみ、また社会福祉士国家試験の合格率は、受験者総数 50 名以上の大学にしぼると全国第 1 位、他大学をはるかにしのいでいます。さらに一昨年度の就職率は、過去最高の 98.8%の数値を得るなど、真摯に勉学に取り組む伝統がしっかりと新大学に継承されていることを裏付けています。しかし、ここで強調したいことは、私達の大学は、単に合格率を誇るレベルの大学ではないと言うことです。それだけでは普通の大学です。大きく変貌する社会の変革期においては、さらにもう一段高い力が皆さんに求められています。そうした社会的背景を認識し、本学では、平成 25 年度から 6 年に亘る第二期中期計画の最重点項目として、さらなる高みを目指した教育の改革を掲げ、現在全学一体となってその推進に努めています。

改革の目標にあるのは、『高度な実践力の養成』です。説明を加えますと、X は Y である、こうした知識を数多く記憶してきたのが今までの小学校から高校までの学びでした。大学では、それだけでは不十分です。X が Y である理由が真に正しいか否かを検証し、その理を深く理解し、併せて X が Y であることを、この社会に何か応用できないかということを自ら考えぬく、この一連の発展的な思考過程を身に付けることがここで言う高度な実践力です。

言葉を変えると、知識を生きたものに変える力こそが実践力であると言え、これからの社会で活躍する皆さんに、最も必要とされる力であると言えます。

実践力を育てるには、皆さんの心の中にそれは何故だろうかという疑問を絶えず発し、問題に対する発見力を磨いておくことが求められます。実はこの疑問を持つ問いかけこそが、文明の進歩の原動力であり、人間に学ぶ喜びを与えてくれます。受験勉強では、与えられた知識や権威ある情報に対して疑うことなく、全て真実であると意識づけられた学習が展開されてきました。しかし、その発想のままでは社会は進歩しません。

一つ例を挙げます。本学の入試でもよく取り上げられていますが、高校時代、生物や化

学の分野で乳酸発酵について学んだことと思います。ドイツのオットー・マイヤーホフは、エネルギー源となるブドウ糖が筋肉内で乳酸に変化することを見出し、筋肉の運動に必要なエネルギーは、この時に生ずるエネルギーに由来するという乳酸学説を発表しました。この成果によって彼は1922年ノーベル賞を獲得しました。しかし、この学説は誤りであり、乳酸の生成を試薬によって抑えても、筋肉が収縮することが 7 年後、デンマークの研究者によって明らかになりました。マイヤーホフが立派であったのは、自らの誤りを素直に認め、誤りの原因をさらに詳細に検討することによって、現在、高校の全ての生物のテキストに掲載されている、ブドウ糖が筋肉や組織内で分解される反応、いわゆる解糖系の 10 段階の反応を明らかにしたことです。なお、以前より、筋肉内で乳酸が生じ蓄積することが疲労の原因と常識のように語られていますが、この説においても、現在、有力な否定する研究があることを付け加えておきます。このように、学問発展の歴史は、学問の根底にある常識を疑い、覆し、新たな常識を作り出してきた歴史でもあるのです。いや科学ばかりではありません。社会の進展、さらにはベンチャーを生み出す創造は、権威ある考えや説に盲従し、常識の中に留まる姿勢からは決して生まれません。

「疑うが故に知り、知るが故に疑う」、これは明治時代の物理学者であり、夏目漱石門下に出入りしていた随筆家、寺田寅彦の言葉です。皆さんは、これから多くの学問分野で問いかけを自ら積極的に発し、知ることの喜びをできるだけ多く実感してください。

未来のあなた自身は、これから自分で作ることができるのです。全ては今からです。高校までの自分では、皆さんは全く社会に対して回答を出していないことを自覚してください。自ら積極的に学ぶ力を基礎にし、知る喜び、学ぶ喜びを限りなく多く本学で体験してください。その喜びは、やがて社会に巣立つ皆さん、そしてこれから新たな社会への地平を切り開く MBA 入学者の皆さんそれぞれにとって大切な、高度な実践力に結びつくはずです。

私達、県立広島大学教職員一同は、皆さんの積極的な学びを基にした、豊かな学生生活を心から支援していくことを誓い、併せてこれからの本学での学びが、皆さんにとって実り多いものとなることを祈念して、私の結びの言葉に変えたいと思います。

県立広島大学へのご入学おめでとうございます。

平成 28 年 4 月 5 日　県立広島大学　学長　中村　健一